

Sci-Comm. Café

科学コミュニケーションカフェ

第3回：「伝わる」申請書の書き方～文章での科学コミュニケーション～

1. 「伝わる」申請書の書き方
 - I. 審査員に「売り込む」つもりで書こう
 - II. タイトで明快なストーリーの作り方
 - III. 読みやすい日本語Tips
2. 美しい体裁の整え方
 - I. 第一印象は大事！
 - II. 「お約束」を守るだけで美しいレイアウトに
3. 先輩〈採択・審査員経験者〉に聞こう！自由座談会

科研費挑戦者へ。

今年も科研費のシーズンがやってきました。

科研費採択の決め手になるのは、もちろん研究計画そのものやこれまでの実績ですが、どんな立派な計画や実績も伝わらなければ意味がありません。

審査員と応募者の専門性は必ずしも一致しませんし、

疲れた頭で短時間しか読んでもらえないかもしれせん。

そんな彼らに「面白い！続きを知りたい！」と思わせるためのTipsを提供します。

8月26日（木） 17:00～18:30

講師：福井智一（研究推進支援本部URA・元日本科学未来館科学コミュニケーター）
高田佳奈（研究推進支援本部URA・多摩美術大学非常勤講師）

会場：オンライン（Webexミーティング）

終了後30分程会場を確保しておりますので、情報交換や交流の場としてご活用ください。

対象者： 本学所属の研究者
（教員から大学院生まで、専門・所属を問わず）
・ 科研費・各種助成金応募予定の方（特に若手・初心者の方）
・ 科研費採択経験者、審査員経験者の方

登録： <https://forms.gle/WGF14Hp6gtMpGD7o9>（Googleフォーム）

お問い合わせ： 研究推進支援本部 gakusai-grp@chuo-u.ac.jp



参加登録はこちら

科研費の季節がやってきた！

今年も科研費（基盤B/C、若手）の季節がやってきました。研究推進支援本部では、若手研究者や科研費初心者の採択率向上のため、「『伝わる』申請書の書き方」と称し、審査員に研究の意義や面白さを伝えるための技術を提供することにしました。

「伝わる」申請書の書き方

科研費申請の採否を決めるのは、もちろん研究計画そのものや実績です。しかし、どんなに意義深く面白い研究であっても、審査員にそれが伝わらなければ意味がありません。「伝わる」ためには、審査員の専門性が必ずしも自分と一致しないことを意識した上で、平易な日本語を使ってシンプルで力強いストーリーを語る必要があります。科研費申請書のみならず、非専門家向けの文章作成全般に役立つTipsを提供します。

科研費申請書のデザイン術

第一印象が大事なのは対面も書面も同じです。審査員は約1週間で数十の申請書を読むため、研究内容を正確にかつスムーズに審査員に伝えるためには、文章を読みやすく整えたり、図表を見やすく作ったりして「情報をデザイン」することが不可欠です。

「センスがないからデザインは苦手…」と思われるかもしれませんが、視覚による情報伝達ルールを理解することで習得は可能です！

ベテラン（採択・審査員経験者）に訊こう！座談会

ベテラン急募！

実際に科研費を何度も採択された人や審査員を経験した人でなければわからないことも沢山あります。そんな先輩・ベテラン研究者を交えて自由な座談会を開きます。「自分に合っている種目は？」「『独創性』って何を書いたらいいの？」など、誰にも訊けなかった質問をぶつけてみましょう。

エントリーはこちら

<https://forms.gle/WGF14Hp6gtMpGD7o9>（⇒QRコード）



ファシリテーター/講師

福井智一（研究推進支援本部URA）

京都工芸繊維大学大学院卒（学術博士）。ショウジョウバエ遺伝学研究の後、青年海外協力隊としてケニア野生生物公社（KWS）にて環境教育に携わる。帰国後、写真家活動、予備校講師を経てJST日本科学未来館にて科学コミュニケーションに携わる。2020年10月より現職。

高田佳奈（研究推進支援本部URA）

神戸大学大学院修士（学術修士）。博士後期課程満期退学。専門は芸術学と文化人類学。学芸員補佐、他大学URA、多摩美術大学大学院助手を経て、国立研究開発法人産業技術総合研究所研究助手、多摩美術大学クリエイティブリーダーシッププログラム（TCL）コーディネーターを務める。多摩美術大学非常勤講師兼任。2021年4月より現職。

研究推進支援本部は、中長期事業計画に基づき学際的研究推進プラットフォームである「Cognitive Diversity」コンソーシアム実現を目指しています。「学彩プログラム」は、その包括的な取組としてURAが中心となって取り組んでいる研究推進活動です。

「科学コミュニケーションカフェ」は、学彩プログラムのひとつ、「共創の場の提供」に位置付けられており、本学研究者に科学コミュニケーションの考え方と技術をつたえることにより、学際的研究基盤形成、研究者個人の能力向上、および大学の社会貢献に寄与することを目的としています。

